

川上宏奨学金

研究テーマ

『1980年代韓国社会とラジオの文化社会学的研究——音楽の視点から』

調査結果の概要

本研究では「テレビがメインカルチャーを牽引する媒体であるなら、ラジオはサブカルチャーを引き寄せる媒体である」という仮説を1980年代の韓国社会を通じて考察した。分析対象は当時の韓国社会における音楽である。

第1章ではメインカルチャーとサブカルチャーという語を使用する理由を述べた。とりわけ、なぜメインカルチャーというあえて抽象的な文化概念を用いるのかについて、当時の韓国社会における政治、音楽的側面に注目し、1980年代前半と後半に分けて述べた。第2章では1960～1970年代、第3章では1980年代の政治的、社会文化的、音楽的側面について整理し、軍事政権である朴正熙と全斗煥政権下での韓国社会を捉えた。

第4章では1980年代前半のテレビとラジオの音楽番組の特徴と人気の要因を分析した。テレビの国内音楽放送の音楽番組について文献調査を行い、管制（control）性を持つ文化としての側面と大衆文化性を持つ文化としての側面があったことを示した。そしてポップソング（洋楽）を放送するラジオの音楽番組の人気の要因について文献、史料、インタビュー記事、新聞記事の調査を行った。その結果、1960年代以降の継続的文化としての要因とラジオという媒体だからこそ現れる限定的要素による要因が作用したものであることが明らかになった。

そして第5章では1980年代後半のテレビとビデオ型歌手（アイドル）、ラジオとアンダーグラウンド歌手の関係について分析した。テレビとビデオ型歌手の関係について文献調査を行い、ビデオ型歌手の番組出演と彼らのミュージックビデオの放送という2つの形態の関係があったことを示した。そしてラジオとアンダーグラウンド歌手の関係、彼らが音楽活動の場としてテレビを避けていた背景には、放送技術の限界があったテレビの音楽番組側が音楽を形式的に扱っていたことに対する違和感、ビデオ型歌手とテレビの関係に対する懐疑があったことを明らかにした。

第6章では第1章と第4、5章での分析結果を踏まえ、先述した仮説を考察した。その結果、1980年代前半のラジオはテレビの音楽番組で発信される音楽とは異なる領域の文化空間を作り上げていたという点でサブカルチャーであった。そして1980年代後半のラジオ

オはオーバグラウンド音楽に「対する」アンダーグラウンド音楽という音楽的な対立構造と相まって、サブカルチャーを発信していたことが明らかになった。